対人恐怖症の異常心理学

研究ノート

佐々木　　淳*

Abnormal psychology for Taijin-kyofusho

Key Words：the offensive cognition, conviction, multi-dimensional assessment, referential thinking

社交不安症の異常心理学

「人前で不安になる」ことは、特に思春期や青年期には誰にでもある悩みの代表格である。しかし、それがあまりに長く続くと生活に支障が出かねない。筆者は臨床実践を行うかたわらで、精神病理のメカニズムを実証的に明らかにしようとする異常心理学（abnormal psychology; e.g., 丹野ら , 2015）に興味をもって研究を行ってきた。確かにこの社交不安という現象自体は自然で身近であるが、それを学問の俎上にあげるのは意外に難しく、それを取り巻く様々な文脈によっても大きく影響を受けてきた。なかなかの難題なのである。「研究ノート」という本稿のカテゴリ名に甘えて、筆者が個人的に考える今後の研究の方向性や日ごろ考察していることについて、ページを少しめくってみたい。

社交不安症？対人恐怖症？ Taijin-kyofusho？

もともと日本では人前での不安や恐怖を「対人恐怖症」と呼んできたが、欧米ではそれに相当する医学的概念は存在していなかった。しばらく時代は過ぎ、1980年になると突如としてDSM-III（APA, 1980）という米国精神医学会の国際的診断基準に社会恐怖（social phobia）が出来、そこから一挙に実証的研究が進むことになった。

すると、日本と欧米での疾患概念の違いを発端に、少し混乱が生じてきた。日本では、例えば笠原（1972）が記述したように、1）発達的に青春期の一時期に見られるもの，2）純粋に恐怖症段階にとどまるもの，3）関係妄想性をはじめから帯びたもの，4）前統合失調症症状として，ないしは統合失調症の回復期における後症状、といった具合に、人前での不安や恐怖をキーワードに神経症から統合失調症へと至るスペクトラム（連続体）を描いていたり、どのように悩んでいるのかについてもそれほど限定しない、つまり比較的広い概念である。しかし日本の「対人恐怖症」が海外に伝えられると、特に注目されたのが「人を不快にしてしまった」という他者志向的な認知があること（加害観念）、そしてそれを「絶対そうだ」と妄想的に信じることがあること（妄想性）であった。そのため、欧米で知られることとなった「Taijin-kyofusho」とは、「人を不快してしまったと妄想的に信じるものである」という限定化された見方をされるようになり、日本や東アジアに特有の「文化依存症候群」とさえ呼ばれた（これらの経緯については、佐々木（2016）で概説している）。

実証的研究への基礎の確立

確かにこうした特有の悩みは、日本人のパブリック・イメージによくあてはまるように感じる方も多いのではないだろうか。しかし、日本文化の背景を持たない患者が同様の症状を呈していることが報告されたり、アメリカの一般サンプルの調査なども行われるようになり、必ずしも日本人に限ったことではないことが示唆されてきた。ついには現行のDSM-5（APA, 2013）の社交不安症の診断基準において、“The individual fears that he or she will act in a way or show anxiety symptoms that will be negatively evaluated (i.e., will be humiliating or embarrassing; will lead to rejection or offend others)”と、

* Jun SASAKI
1975年12月生
東京大学大学院総合文化研究科博士課程修了（2005年）
現在、大阪大学大学院人間科学研究科
准教授　博士（学術）
臨床心理学・異常心理学
TEL：06-6879-8028
FAX：06-6879-8028
E-mail：sasaki@hus.osaka-u.ac.jp

加害観念に関連する項目（下線部は筆者）が新たに取り入れられるに至っている。大きな影響力をもつ診断基準において取り入れられたことで、加害観念やそれに伴う妄想性の仕組みというテーマを研究しやすくなってきたと考える。

上の展開を別の言葉で言い換えるならば、社交不安症に加害観念という症状が存在するということが診断基準で共有されたことを意味している。異常心理学は、精神症状がどのような仕組みで発生し、維持され、最終的に生活に支障が出てしまうのかを研究してゆく。筆者はどのような仕組みで加害観念が発生するか、つまり加害観念の存在の有無を決定する要因だけでなく、加害観念の質を決定する要因を探る必要があると考え、研究をはじめている。特に、Taijin-kyofushoの加害観念に対しては、加害観念があるならそれは必ず妄想的であるという誤解を受けやすかった。そのため、体験の質の中でも、それを確信するかどうかの度合い（確信度）にも幅があることを明らかにし、それがどのような要因によって高められるのかについて焦点を当てる方向性が有益だと考えている。

神経症と精神病の二分法を超えて：多次元アセスメントに基づく研究

まず、こうした対人恐怖症の「妄想」をどうとらえるべきなのか、という大きな問題が横たわっている。日本にも大きく影響を与えてきた精神科医であるKarl Jaspersの記述精神病理学は、精神病を持つ者の了解不能な妄想と、神経症にあらわれる了解可能な妄想を質的に区別しているが、統合失調症にみられる妄想であっても、了解不能とは言えないものが存在していることがこれまで明らかになっている。また、Freeman & Garety（2003）も、エビデンスによって神経症と精神病の双方を明確に区別することが出来ないこと、また神経症と精神病を区別して別個に研究にすることの弊害を指摘している。

統合失調症に関して言えば、妄想の「ある」「なし」だけではなく、その体験を詳しく知る目的で、多次元的アセスメントという方法論が確立している。例えば、Kendler et al.（1983）は、確信度（その妄想をどれぐらい信じているか）、心的占有度（その妄想でどれぐらい頭がいっぱいになるのか）、般化度（その妄想をどれぐらい一般化するのか）、内容の奇異さ（どれぐらい内容が奇異なのか）、解体度（どれぐらい解体した妄想なのか）といった次元から妄想を評価している。統合失調症以外では強迫症についても同様のアセスメント研究がなされてきたが、社交不安症ではこれまでこの方法論はあまりなされてこなかった。つまり、症状の頻度（どれぐらいそれを体験するのか）についての尺度が主流であり、確信度をはじめとした体験の質はあまり取り上げられてこなかったと言える（Sasaki et al., 2013）。

筆者らは、社交不安症患者の臨床記録から加害観念に関する項目を抽出して開発された、Social Anxiety Discomfort to Others Scale（Rector et al., 2006）という尺度を日本語訳し、信頼性・妥当性を確認した。そして、多次元アセスメントに基づくデータを収集している。例えば、佐々木・橋本（2014）では、頻度（どのぐらい体験するのか）・苦痛度（どのぐらい苦痛なのか）・確信度（どのぐらい信じているのか）という3つの次元から加害観念を測定し、それぞれに影響を与えている認知的要因を検討している。

関係づけ的思考への着目

「敏感性格者（ひかえ目で内気で、対人関係や相手の気持に非常に敏感な性格の持ち主）が、ある困難な対人的・社会的状況に置かれ、この状況から長期間のがれることができないとき、関係妄想、注察妄想、被害妄想、被愛妄想などを抱き、しかも臨床精神医学的次元では、統合失調症の妄想型やパラノイアと区別しがたい病像を呈する」（荻野，1993）というのは、20世紀初頭の精神科医Ernst Kretschmerが記述した敏感関係妄想である。本稿の読者も思春期や青年期には、周りの人のちょっとしたしぐさを自分と関係付けることがきっとあったことだろう。

Lenzenweger et al.（1997）は、周囲のことを自分と関係づける認知的傾向である、関係付け的思考の測定尺度（Referential Thinking Scale：REF）を開発した。妄想的な加害観念をもつ症例に多くみられるのは，他者の何気ないしぐさを自分に結びつける認知的傾向であるため、この関連付け的思考と加害観念の確信度には関連が予想される。つまり、こうした傾向を持っている人は，「他者を不快にした」という疑いが生じると他者のしぐさを参照し、自分

への結びつけを繰り返し行うため、「相手がこんなしぐさをするのは、相手を不快にしてしまったからに違いない」と、確信に至る認知的プロセスが予想される。現在、著者らによって日本語訳したREF尺度を使用してこのプロセスを検討している。

最後に

欧米で考案されている社交不安症の説明モデルは、加害観念や関係付け的思考、妄想性という要素を含んでいない。また、臨床実践の中で関係付け的思考をもつ患者に出会うと、重篤な印象につながることが多い反面、誰しも発達過程の中で体験するという日常性もふまえたい。このように様々な軸が絡み合った対人恐怖症関連の現象の理解には、異常心理学が不可欠であり、これから多くの研究を必要とする。興味のある方々のお知恵やご協力をあおぎたい。

参考文献

佐々木淳 (2016). 現象としての社交不安（第3回）：対人恐怖症は日本文化に固有の現象なのか？ ちとせプレス.（http://chitosepress.com/2016/01/14/1002/）

Sasaki, J., Wada, K., & Tanno, Y. (2013). Understanding Egorrhea from Cultural-Clinical Psychology. *Frontiers in Psychology*, 4:894. doi: 10.3389/fpsyg.2013.00894

丹野義彦・石垣琢麿・毛利伊吹・佐々木淳・杉山明子 (2015). 臨床心理学 (New Liberal Arts Selection シリーズ). 有斐閣.